農薬の登録内容は頻繁に変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針（http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html）から。
農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）

営農インフォ

営農総合センター　営農指導課（072-444-8001）

野菜

たまねぎ

◆追肥

中生種は2月中旬、晩生種は2月下旬に2回目の追肥を施す。10a当たりいずみの化成（8-8-8）などの化成肥料を60～90kg施す。

また、追肥後の中耕除草は根を傷めないように軽く行なう。雑草の発生が見られる場合には茎葉処理型の除草剤を使用する。特にこの時期に発生が多いスズメノカタビラにはホーネスト乳剤の効果が高い（表1）。

◆かん水

土壌の乾燥が長く続くと、追肥後に濃度障害が出たり、根が寒害を受け、肥料の吸収が遅れることが多々あるので、晴天の日の午前中にうね間に走り水程度のかん水を行なう。

◆病害虫防除

べと病、白色疫病に注意する。これらの病気は2～3月に温暖で、雨が続く場合に多発しやすいので、水はけの悪い畑など、発生の多いほ場では排水を良くするとともに、早期防除に努める。

発病を認めた場合には、表2のいずれかの薬剤を散布する。

さといも

マルチ栽培の催芽は2月中下旬より始める。黒斑病予防のため、伏せ込み前には必ず種いも消毒を行なう。

◆種いも消毒

トップジンM水和剤（200～500倍／1回）に20～30分間浸漬し、植え付ける。

◆催芽

種いもは無病で優良系統の種いもを選別し、10a当たり約200kgを準備する。催芽床はハウス内で、うね幅1.5mのうねを約20m用意する。種いもを大小に区別して、密に並べ、3cmほど覆土する。十分かん水した後、ホロ型のトンネルを被覆し、日中20～30℃の温度に保温する。

催芽日数は、乾燥貯蔵のいもで40～50日、生いけ貯蔵のいもで30～35日程度である。

水なす

◆定植

ハウス無加温半促成栽培の定植開始時期となるので、定植の2～3日前に十分かん水し、小トンネルをかけて、地温をできるだけ高めておく。

定植後は乾燥気味に管理し、かん水をする場合は、地温を下げないよう晴天の日の午前中に軽く行なう。

◆病害虫防除

①ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマなどの防除

ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマなどを本ぽに持ち込まないよう、本ぽの雑草を除くとともに、育苗後期の防除を徹底する。

定植時にミナミキイロアザミウマの発生が見られる苗ではアルバリン粒剤（1～2g／株／植穴土壌混和／1回）を、ミカンキイロアザミウマの発生が見られる苗はアクタラ粒剤5（2g／株／植穴処理／1回）などを処理する。

定植後にアザミウマ類の発生を認めたら、発生初期に薬剤を散布する。

なお、ミカンキイロアザミウマの防除には、アーデント水和剤（1000倍／収穫前日まで／4回以内）またはコテツフロアブル（2000倍／収穫前日まで／4回以内）、スピノエース顆粒水和剤（2500～5000倍／収穫前日まで／2回以内）を散布する。同じ薬剤を続けて使用すると抵抗性がつきやすくなるので、必ず異なる系統の薬剤でローテーション散布を行なう。また、薬剤ごとに一作当たりの総使用回数が決められている。水なすは栽培期間が長いので、栽培途中で総使用回数を超えないよう散布薬剤の選定に注意する。

＊アルバリン粒剤、スピノエース顆粒水和剤は、アザミウマ類で登録がある。

②すすかび病、うどんこ病の防除

近年、すすかび病やうどんこ病の発生が多くなっている。晴天の日には換気をし、施設内の空気を入れ替えるとともに、発生初期に表3、表4の薬剤をローテーション散布する。

果樹

果樹全般

◆土づくり

タコツボによる深耕は、深さ30cm、直径40cm程度の穴を掘り、堆肥などの有機物に熔燐を片手一杯程度を混ぜ、埋め戻す。太い根を切る恐れがあるため、一樹当たり2か所程度とし、3年かけて樹冠を一周するようにする。

みかん

◆せん定

密植園では、ふところや、すそ葉は日が当たりにくく、土壌が乾きにくいため、果実の糖度は上がらない。また、風通しが悪いため病害虫が発生しやすく防除等の作業性も悪いのでせん定前に間伐しておくと良い。

寒害の心配がなければ2月15日前後から行なう。せん定が早ければ、新梢の発育が良くなる。

切り返し（枝の途中で切る）せん定を主体とする。鉛筆から小指程度の太さの枝を切り返すとともに、春枝と夏枝の境目の少し上で切る枝を多く確保する。こうすることで、来年の結果母枝となる新梢を多く発生させることができる。

前年に実がついていた結果枝を多めに残す。結果枝から発生する新梢は良い結果母枝となり、翌年良い実がつきやすい。

◆施肥（春肥）

春肥の施用も早めに行ない、新梢の発育を促す。せん定時期よりも先に行なう。雨が少なければ春肥の効きが悪くなるため、できれば施用後軽く中耕する。

もも

◆休眠期防除

縮葉病は3月下旬以降の発芽・展葉期に雨が多いと発生しやすい。特に、風当たりの強い園では多発する恐れがある。2月下旬から3月上旬に、石灰硫黄合剤（7倍／発芽前：メーカーにより登録内容が異なるのでラベルを確認して使用する）を散布する。特に、枝の先端は掛け残しのないよう注意し、暖かい無風の日の午前中に、ムラがないようていねいに散布する。毎年縮葉病の発生が多い園では、3月下旬に、チオノックフロアブル（500倍／収穫7日前まで／5回以内）を、開花までに2回散布する。

◆日焼け防除

主枝・亜主枝の日焼けの心配がある場合は、ホワイトンパウダー（炭酸カルシウム剤）を塗布したり、肥料袋などで被覆する。

いちじく

◆せん定

せん定は3月上旬までに行なう。凍霜害を受けやすい園では遅れると切り口から樹液が出て樹勢が低下したり、発芽が遅れるので注意する。前年の結果枝基部の2芽を残してせん定する。樹勢が弱い場合は上芽を、強い場合は横芽を利用する。残す芽のすぐ上で切ると、切り口が乾燥して亀裂が入り、枝の伸びが悪くなるため、3芽目のすぐ下で切る。

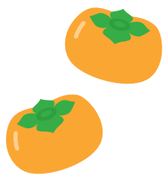
◆凍霜害対策

せん定直後から4月の発芽まで主幹や主枝をワラや防寒資材で被覆しておく。

かき

◆粗皮削り

太い枝の分岐部などで越冬する害虫が多い。そのため、粗皮を削り落としておけば、越冬害虫を少なくすることができる。



うめ

◆開花期の受粉

低温や強風、受粉樹が少ない場合、結実不良になるので、開花盛期の小梅類の枝をバケツに生け（10a当たり10か所以上）、株元に置いておく。

表1　たまねぎに登録のある主な茎葉処理型の除草剤

薬剤名	10a当たりの農薬使用量	10a当たりの散布液量	使用方法	使用時期	使用回数
セレクト乳剤	50～75mℓ	100ℓ/10a	雑草茎葉散布	雑草生育期（イネ科雑草3～5葉期）ただし収穫21日前まで	3回以内
ホーネスト乳剤	75～100mℓ	100～150ℓ/10a	雑草茎葉散布	雑草生育期（イネ科雑草3～5葉期）ただし収穫14日前まで	2回以内

表2　たまねぎ病害（べと病・白色疫病）に登録がある農薬

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
リドミルゴールドMZ	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	100～300ℓ/10a
ホライズンドライフロアブル	2500倍	収穫3日前まで	3回以内	100～300ℓ/10a

表3　なすのすすかび病に登録がある農薬

系統	薬剤名	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
EBI剤系	トリフミン乳剤	2000倍	収穫前日まで/5回以内	100～300ℓ/10a
	ラリー水和剤	4000～6000倍	収穫前日まで/4回以内	150～300ℓ/10a
グアニジン系	ベルクート水和剤	3000倍	収穫前日まで/3回以内	150～300ℓ/10a
有機塩素系	ダコニール1000	1000倍	収穫前日まで/4回以内	100～300ℓ/10a
ポスカリドアニリド系	カンタスドライフロアブル	1000～1500倍	収穫前日まで/3回以内	100～300ℓ/10a

表4-1　なすのうどんこ病に登録がある農薬

系統	薬剤名	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
EBI剤系	トリフミン乳剤	2000倍	収穫前日まで/5回以内（パンチョTF顆粒水和剤と合わせて5回以内）	100～300ℓ/10a
	ラリー水和剤	4000～6000倍	収穫前日まで/4回以内	150～300ℓ/10a
	パンチョTF顆粒水和剤	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100～300ℓ/10a
グアニジン系	ベルクート水和剤	3000倍	収穫前日まで/3回以内	150～300ℓ/10a
キノキサリン系	モレスタン水和剤	2000～3000倍	収穫前日まで/3回以内	100～300ℓ/10a
アニリノピリミジン系	フルピカフロアブル	2000～3000倍	収穫前日まで/4回以内	100～300ℓ/10a

表4-2　野菜類のうどんこ病に登録がある農薬

系統	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
生物農薬	ボトキラー水和剤	1000倍	発病前～発病初期	―	150～300ℓ/10a
脂肪酸グリセリド	サンクリスタル乳剤	300～600倍	収穫前日まで	―	150～500ℓ/10a

※ボトキラー水和剤は、野菜類で登録がある。
※サンクリスタル乳剤は、なすで登録がある。なす、ピーマン、はくさい、チンゲンサイ等に使用する場合、幼苗期には、葉先枯れを生じる事があるので使用しない。また、高温時には、葉に薬害を生じる事があるので、施設では温度管理に十分注意する。
※モレスタン水和剤は、盛夏の高温時および施設内の高温時での使用は、薬害を生じる恐れがあるので、所定範囲内での低濃度で使用する。また、定植直後や幼苗・軟弱苗などには使用しない。

＊農薬名の後の括弧内は、（希釈倍数／使用時期／総使用回数）を表示しています。